

説明B . JXW	16830	説明M Z. JXW	19637
説明C F. JXW	29328	説明N . JXW	28204
説明C O. JXW	31206	説明O . JXW	30146
説明C Z. JXW	18011	説明P L. JXW	33945
説明D N. JXW	23577	説明P Z. JXW	19666
説明D Z. JXW	17146	説明Q R. JXW	26206
説明E . JXW	31080	説明S M. JXW	31692
説明F . JXW	32646	説明S Z. JXW	25887
説明G H. JXW	29999	説明T . JXW	27992
説明I O. JXW	28248	説明U . JXW	15031
説明I Z. JXW	22434	説明V . JXW	28332
説明J . JXW	19466	説明W Z. JXW	28379

【文 献】

- [1] 岡本 茂, 松山 泰男, 大島 邦夫 編著: 精説コンピュータ理工学辞典, 共立出版(株), 1997
- [2] 岡本 茂, 松山 泰男, 大島 邦夫 編訳: マイクロコンピュータ辞典, 共立出版(株), 1984。
これは C. J. Sippl: MicroComputer Dictionary (1981, 2nd edition) の翻訳である。
- [3] 岡本 茂 他: パソコン用語事典, (株)技術評論社, 1987~現在
- [4] MOTOROLA: MC68020 32-Bit Microprocessor User's Manual, Prentice-Hall, 1984
- [5] 島内 剛一 他編: アルゴリズム辞典, 共立出版(株), 1994
- [6] 土屋 俊 他編: AI事典, (株)ユー・ピー・ユー, 1988
- [7] 安西 祐一郎 他編: 認知科学ハンドブック, 共立出版(株), 1992

辞典の編纂について

説明いん. JXW	26980	説明てん. JXW	28673
説明う . JXW	9585	説明とも. JXW	35546
説明え . JXW	25009	説明とん. JXW	16895
説明お . JXW	36392	説明な . JXW	13452
説明かお. JXW	28774	説明に . JXW	30498
説明かこ. JXW	19183	説明ぬ . JXW	344
説明かの. JXW	34273	説明ね . JXW	15182
説明かん. JXW	30132	説明の . JXW	3851
説明きこ. JXW	23981	説明はそ. JXW	32461
説明きほ. JXW	21781	説明はの. JXW	20698
説明きん. JXW	27691	説明はん. JXW	15429
説明くよ. JXW	12300	説明ひて. JXW	24711
説明くん. JXW	26093	説明ひん. JXW	17037
説明けた. JXW	21976	説明ふい. JXW	22053
説明けん. JXW	21720	説明ふよ. JXW	25519
説明こう. JXW	21431	説明ふれ. JXW	30286
説明こそ. JXW	27182	説明ふろ. JXW	37327
説明こわ. JXW	22410	説明ふん. JXW	22649
説明こん. JXW	28895	説明へ . JXW	27329
説明さお. JXW	21321	説明ほ . JXW	21746
説明さん. JXW	26310	説明まそ. JXW	21634
説明しす. JXW	34037	説明まん. JXW	17449
説明しも. JXW	22790	説明み . JXW	6473
説明しゆ. JXW	27930	説明む . JXW	4352
説明しよ. JXW	33112	説明め . JXW	22729
説明しん. JXW	15153	説明も . JXW	12619
説明すち. JXW	23736	説明やよ. JXW	20573
説明すん. JXW	25026	説明ら . JXW	13870
説明せ . JXW	36838	説明り . JXW	26689
説明そ . JXW	28069	説明る . JXW	6751
説明たお. JXW	21800	説明れ . JXW	22751
説明たん. JXW	29563	説明ろ . JXW	18382
説明ちゆ. JXW	26982	説明わ . JXW	10402
説明A I. JXW	23243	説明K . JXW	7953
説明A N. JXW	10071	説明L . JXW	22304
説明A Z. JXW	22008	説明MN. JXW	33143

付録 1

精説コンピュータ理工学辞典の用語数

先頭の文字に用語数が続く。ただし、これは最終編集の途中の話で、正確なものではない。厳密にはこういった時期があったと解すべきデータである。

A 153	N 34	行別データ	あ 220	せ 163	ひ 156
B 59	O 70	あ行 661	い 181	そ 127	ふ 464
C 200	P 148	か行 1335	う 38	た 227	へ 96
D 150	Q 18	さ行 1128	え 104	ち 143	ほ 89
E 95	R 72	た行 914	お 118	つ 34	ま 137
F 89	S 153	な行 238	か 404	て 327	み 29
G 47	T 78	は行 1054	き 286	と 183	む 25
H 50	U 44	ま行 329	く 136	な 43	め 89
I 147	V 75	や行 83	け 158	に 128	も 49
J 54	W 45	ら行 509	こ 351	ぬ 4	や 1
K 25	X 34	わ行 43	さ 186	ね 44	ゆ 46
L 60	Y 9	合計 6294	し 481	の 19	よ 36
M 138	Z 4	総計 8395	す 171	は 249	わ 43
		計2101			計 6294

付録 2

ファイルの分布

一太郎Ver.3を使ったから、JXWという拡張子を持ったものだけをここにまとめる。これには共立提出後の変更がある。なお、基本的にはテキストファイルである。ひらがなの部分が74ファイル、英字の部分が30ファイルある。

たとえば、説明あほ.JXWにある用語は、先頭が「あと」で始まり、「あほ」までとなっているので、「穴埋め」などが用語として含まれる。また、説明GH.JXWはGとHで始まる用語から成る。説明QR.JXWと説明WZ.JXWについても同様である。原則として、ファイルの大きさが35Kバイトを超えないように留意し、フロッピーディスクから読み出すときの所要時間も考慮した。本来はハードディスクを使うべきだったかも知れない。

バイト数は参考までに併記したもので、ファイルの大体の大きさを知るのに役立つ。この他、項目についても同様なファイルがある。

ファイル	バイト数	ファイル	バイト数
説明あて.JXW	28763	説明ちん.JXW	10456
説明あほ.JXW	18314	説明つ.JXW	7410
説明あん.JXW	14874	説明てそ.JXW	31880
説明いわ.JXW	26603	説明てた.JXW	34170

8. 最後に

書き留めておくべきことで、まだ書いてないことをここにまとめる。

最初に用語を入手したとき、それをフロッピーディスクに打ち込んだのは、茨城大学理学部の学生である。私のゼミの学生でまじめな人に頼んだが、この人たちは打ち込みや読み合わせなどを含めて、きちんと仕事をしてくださった。これが今回の仕事の実際の出発点である。ここに厚く感謝する。

また、共著者との連絡では小山が一切を引き受けてくれた。たとえば、数年ごとに原稿を共立経由で共著者に送っていただき、見ていただいた。また、共著者との協議では連絡や記録をすべて引き受けてくれたので、事務的には楽ができた。特に最終原稿提出時直前の協議が最終であったが、ここでは書名の決定などを含めて、いろいろなことがあった。面倒なことを彼が引き受けてくれたおかげで、無事に出版までこぎつけることができた。

最初は「コンピュータ小辞典」を作る予定であった。小辞典ではせいぜい3000語程度集まればよいであろう。そこで書名をどう変更するかが問題となった。たとえば、コンピュータ大辞典などを含めて、いろいろな書名案が出ては消えた。結局、「コンピュータサイエンス理工学辞典」として、細かいことは私と小山に一任された。「理工学」については、最後まで協議したことになる。「精説」をつけるべきだというのは、最初は小山から出た話である。こうして、出版ぎりぎりまで粘って、書名が定まった。

参考文献は実に多かった。最初は文献名などをファイルとして保存したこともあったが、発行中止の雑誌や単行本の版の変更などがあり、記録ミスや記録落ちも出てきた。関係者との話し合いも本来は資料として記録すべきであったろう。こういったことがあって、ファイルとして公表できるものではなくなってしまった。こういうものを個人で整理するのは、かなり大変である。そのため、データ量の多さとあわせて、[1]でも割愛せざるを得なかった。

この他にも記録しておくべきことがあると思うが、思い出せない方が多い。10余年という年数は短くない。勤務先が替わり、仕事の内容が変わり、後半には家の建築ということがあった。そのため、資料を整理せざるを得なくなったこともある。

今後は改版を含めてもう少し仕事をしなければなるまい。それを含めて、共著者と十分に協議し、なるべく息の長い仕事をしていきたい。コンピュータサイエンスの進歩の速さを考えれば、こういった辞典の改版は眼に見えている。その具体的な処理が問題である。

をチェックし、それから共著者の校正とのマッチングをやり、もう一度全体を見直すということをやった。このためかなりの長時間を要した。

また、原稿における人名や地名をどのように書くかが問題になった。最終的には人名は原則として原綴りによることとし、どうしても原綴りが見つからないときはその場で協議することとした。どうしても人名の原綴りがわからず、没にした用語もある。また、社名は略字による場合を含め、なるべく原綴りを使うこととした。同様に、外国の大学名にはカタカナと原綴りを使った。地名には原則として原綴りを使った。

そうはいても、いろいろな場合があり、単純でない。たとえば機械翻訳に関するピアス勧告などでは、ピアスは人名である。これは併記することで補った。また、プログラム言語のパスカルでは Pascal を使うこととし、Pascal の方で説明することとした。

この他にも問題があったが、すべて小山と協議して解決した。上にあげたものは、特に私の印象に残っていたものである。このため、小山との連絡では電子メールがたいへん有効だった。共立には WIDE に関係したメールアドレスがあり、大学にもネットワーク kitnet ができ、インターネットが使えるようになったので、共著者や共立との連絡には原則としてメールを使った。急を要するものは電話により、印刷に時間がかかる大量のデータや確認を要するデータはファクシミリによった。

技術が進歩したおかげで、全体の校正は [2] における時とは比較にならない程楽であった。将来どのようになるかは予測できないが、エディタがもう少し使いやすくなり、印刷技術とさらにマッチングするようになれば、もう少し楽になるような気がする。現在の技術では一太郎などのエディタとかみ合わない点があり、それは校正などで修正した。たとえば上付きや下付きの文字がそうならない点は、早急に解決していただけるとありがたい。これは [2] や [3] の場合もそうだった。罫線についても同様である。

最終校正も 2 種類あり、一つは壮光社での校正である。これは私も数日参加した。ミスは尽きないもので、かなりあった。もちろん直しが多いと本の定価に影響するが、これはまだいくらでも直せると考えてよい。それに先ほどのように原稿と異なったものが出てくるから、壮光社側の責任がないわけではない。ここでの直しは、ある程度フロッピーディスクにおさめることができた。

もう一つはそれがすんでからの校正で、簡単にいえば版上でミスを直す作業である。この版で印刷するのだから、フロッピーディスクなどはもちろん使えない。ここからの校正はすべて有料で、本の定価に影響すると考えるべきであろう。私自身の不注意もあって、一応校正がすんでしまった時点で、2 つ程ミスを思いだし、それを版上で確かめ、一部を直すということがあった。こういうミスがあるから、最終校正はどんな場合でもなくなるであろう。こうしてようやく印刷されたのが、7 月中旬である。できあがった辞書を何冊かいただき、それに挨拶をサインしてお世話になった方々に送った。

また、捨てた用語が後で必要になるかも知れないから、それはフロッピーディスクに入れて保存してある。これは実際にはほとんど生きることはなかった。この他に共著者が捨てるべきだといった用語ももちろんあり、ある程度の語数になっていた。それについては私が最終判断を下し、捨てたものは別に保存するように心掛けた。この記録は貴重なものと考えている。

雑誌も生まれては消え、消えては生まれる。関係する雑誌や単行本は山のように出版されている。たとえば、日経BP社だけでも多数の雑誌や単行本が発行されている。それらを全部読むことは不可能である。だから、自分の気付いた範囲でデータを集め、説明を考え、原稿を書くことになる。長い間には、かなりの追加や修整があった。なるべく落ちがないように注意するが、完璧は期し得ない。

もちろん、追加や誤りを共著者から指摘されたこともあり、私自身が気付いたこともある。気付いた誤りはもちろん修正した。10余年という時間がここではたいへん役に立った。また、共立では小山が中心となって編集校正に当り、非常に努力された。その意味では、莫大なエネルギーがこの辞典につき込まれたことになる。それでも完璧とはいえない。

関連団体は小山の発案で集め始めたものである。もちろん、最初は私がいくつかを集めていた。それをもっときちんとやることになったわけで、ここは大幅な予定変更である。これは実際には1996年頃から話が始まり、最終的には彼が各団体をまわって原稿や資料を集め、それを私が書き直してまとめあげた。最終的にはかなりの団体がリストアップされたことになる。

これは私自身にもたいへん勉強になった。ただし、提出された資料の関係で、団体によって記述の長短が生じたのはやむを得ない。また、各団体の URL は資料から私が拾い出し、それを共立で確認していただいた。これにはミスプリントもあり、かなりの修正があった。E-mail address についても同様である。公表しないという条件でそれを教えていただいたものもある。

7. 原稿の最終取りまとめから出版まで

契約書によれば、一応の原稿提出は1996年12月である。項目一覧を含めて、4枚のフロッピーディスクで提出することができた。原則は先頭文字でファイルにまとめることになるが、ファイルの大きさがあるから、それほど単純ではない。たとえばW行からZ行までを1つにまとめ、あ行を3つに分けている(付録2参照)。

これをある程度修正して壮光社に持ち込み、できあがったげら刷りを基に小山が赤を入れ、それを共著者が校正し、最後にそれらを総合して私が校正した。ここではいろいろな問題が起こった。

最初に気が付いたのが原稿の不完全で、→と＝のマッチングがうまく取れているかどうかである。これが実は最初から気になっていた。要するに→や＝で指摘した用語があるか、きちんと説明ができているかどうかである。→や＝で回り回って元に戻っているのでは、辞典にならない。行方不明はもっと困る。このため、げら刷り全体が揃うまでは校正が終わらないということになってしまった。本来は原稿提出時に済ませておけばよかったことではあるが、これはエディタだけでは困難な仕事であろう。それ

ミングを勉強することができた。これは手探りで大変だったが、おかげで私の関係する範囲が広がった。

この他に、The Lifeboat社のPERSPECTIVE、日立製作所のカタログや雑誌、丸善のスペクトラム、その他の多数の雑誌などを参考とした。これらを通読した感じからいえば、非常に内容の幅が広い。私に取っては一種の雑学であったが、コンピュータサイエンスそのものが急速に進歩するから、それを理解するためには、このような雑学もかなり必要である。

また、1990年代にはコンピュータネットワークが実用期に入ってきた。これはもちろん大切な資料として、収集しなければならない。ちょうど私自身が茨城大学のコンピュータネットワーク設計に関係したので、資料がお互いに参考になった。文字化けなどということ、実際に見たのもこのときである。各種プロトコルなどを含めて、具体的な意味を勉強する機会がさらに与えられたことになる。

最近ではEL-NETというネットワークがあって、いろいろな新聞における記事を、自動的にファクシミリで集めることができる。時期的にはこれが数年前から始められたこともあり、私はこのネットワークを使わなかった。原則として、新聞における記事を切抜きで集める手法によったが、新聞によって内容に厚薄があり、注意すべき点が結構ある。参考にした新聞は数種類で、雑誌などとあわせて記事を眺めることになる。切抜きを集めるのもそれほど楽ではない。集めた切抜きはフロッピーディスクに記録し、時々まとめて捨てるのだが、これが結構な量にのぼった。

6. 用語の収集と説明(2)

1995年からは収集範囲がさらに広がり、認知科学関係が加わることになった。こうして、論理体系、思想／哲学、知識表現などにも踏み込んでいったおかげで、1996年頃の収集語数は8000語を超えるようになった。このとき有効な単行本としては、特に[6]と[7]がある。ある時点では10000語を目標としていた。

また、1996年末ごろに暗号関係の文献を見る機会があり、これでEscrowなどを増強した。また、最後の段階でABCマシンやENIACなどを増強することができた。資料の収集には運がともなうこともある。この頃から出版時期に関する話が出るようになった。

ある程度用語が集まった段階で項目一覧を作り、それに基づいて用語数を計算した(付録1参照)。これは収集した用語の説明をすべて省く方法で集めたもので、1行の長さをかなり大きく取ってある。ねらいは行数が用語数と一致することで、それによって用語数が計算できる。

ただし、実際には最後の編集段階で、並べる順序を一部変更し、用語を取捨選択している。これにより用語数が変化するので、最後の編集段階における用語数は厳密にはわからない。しかし、大体の用語数はわかる筈である。1996年末には8000語を少し超える程度 of 用語が集まっており、1997年5月段階には8500語程度になっている。ただし、用語の表現は略語も含めて一通りではなく、同義語ももちろんある。したがって、この用語数は本当の意味の用語数ではない。また、現在の印刷技術では項目一覧をある程度自動的に作ることができる。[1]の英和索引は、この方法で作ったものである。

る。この2つのOSがそれぞれ標準化され、OSFとUIができあがっている。そしてUSLが生まれ、1993年9月に共通のAPI仕様を作成することとなり、一本にまとまった。

また、コア(core)という用語も時間とともに多様化している。コアメモリといえば、かなり古い記憶素子で当時はそれを単にコアともいっていた。それがUNIXで使われるようになり、また、OSやコンピュータグラフィクスでも意味があるようになった。インターネットでもこれは使われている。

こういった状況変化をどこまでさかのぼって記録すべきか、原稿にどこまで書けばよいか、それが難しい。詳しく書けば1冊の単行本になる事柄が山のようにある。それを簡潔にまとめるのは、著者に課せられた基本問題である。その態度によって辞典が方向付けられ、内容の理解しやすさなどに影響する。

立場を守るというのは存外難しい。しかもコンピュータサイエンスの進歩はかなり速い。秒進分歩というのは大げさだが、とにかく確実に新しい概念が次々と生まれ、それが非常な速さで実用化される。

たとえばCPUでは次々と新しいものが生まれ、86系プロセッサでは、約10年の間に8086からPentium系列へと進歩した。この原稿を書いている時点で述べれば、開発コードでTillamook (Pentium IIIの予定、1997年秋出荷予定、ノート用 200MHzと233MHzのMMX Pentium)、Deschutes (1998年前半出荷予定、400MHz動作)、Katmai (1998年末から1999年出荷予定、500MHz動作)というプロセッサがあり、低電圧で動作するようになっている。64ビットプロセッサ Merced もすでに米国特許が成立し、その動作周波数は600~800MHzで、1998年後半出荷予定ということである。

また、ストレージも進歩する。私がミニコンを扱い始めた1970年代初頭には、4Kワードのコアストレージが使われていた。これはもちろん高価で、4Kワードで百万円を超えており、しかも大学の予算も乏しく、ストレージの増設は非常に厳しかった。それを使いやすくするため、64Kワードのハードディスクを設置したが、それが約二百万円であったような気がする。

現在は、8Mバイトストレージが2万円以下で買え、1Gバイトのハードディスクが数万円で買えることを考えあわせると、時代の変化の速さにびっくりせざるを得ない。

このミニコンでOSやブートストラップを設計し、使いやすいアセンブラやインタプリタを作ったが、それもそんなに簡単ではなかった。それが、今はインタプリタやコンパイラ的设计は学生レベルでもやれる。これはソフト面における大きな進歩である。昔は10年単位の動きが常識であったと思うが、今は数ヶ月単位で動いているような感じがする。これは熟年者のたわごとかも知れない。

このようないろいろな進歩を辞典に織り込まねばならず、ハードウェアなどに全然触れないわけにはいかない。どの程度にハードウェアを取り上げるべきか、それが私にまかされた大きな課題であった。

幸いにして、[3]にはハード的な事項がかなりある。私自身はソフトウェア関係を主として勉強してきており、ハードウェアを勉強する機会が少なかったから、これはたいへんありがたかった。さらに、CP/Mを通じてZ-80の機械語やアセンブラを使うようになり、茨城大学の入試情報処理で活躍することができた。

こういう機会を通じて、[4]におけるいろいろな図表が理解できるようになり、いわゆる信号のタイ

ピーディスクを使った。なお、PC-9801 についてはリコーシステムと東北日本電気にお世話になり、実際にはこの 2 台が最後まで活躍した。

フロッピーディスクにより記録し、かならずバックアップを用意した。そして、いろいろなデータをこまめにフロッピーディスクにおさめ、内容を確認しながらデータベースを作っていた。PC-9801 を、同時に複数台使ったこともある。また、共著者とのデータ交換はすべてフロッピーディスクによったが、途中からは 3.5 インチのものも使うことになった。ディスクが途中でおかしくなるようなことも、数回あった。これはやむを得ないことかも知れない。

ついでに言えば、現在ならばウィンドウズで MS-Office などを使うことになるだろう。[1] の場合には、一太郎を研究室で購入したからそれを使ったのであって、他のエディタを知らなかったわけではない。RED や Final を勧めてくれた方もあり、それを一時使ったこともある。

どんなエディタでも使いこなせば、かなり原稿製作が便利になる。ただし、バージョンが変わると新しい機能が追加されて便利になるが、その辞書が全く新しいものになりがちである。辞書が共通であればバージョンの更新はありがたいのだが、一太郎ではそうでなかった。10 余年の間、古いバージョンの辞書にかなりの単語を追加してきたから、それを途中で変更することはたいへん難しい。こうして、古いバージョンをそのまま使うことになってしまった。なお、かなり新語を追加したから、局所的に追加不能になっている。しかし、それでも使いなれた辞書は便利なものである。

同様に、共立でも一太郎 Ver.3 が生きている。[1] の場合には、これで作ったテキストデータを基に壮光社で組み上げていただき、そのげら刷りを校正した。ここではインターネットやパソコン通信によるメールが非常に有効だった。これを使うと連絡や校正の手段が大幅に変わり、もっと便利になる。うまくいけば、単行本の製作費はかなり下がる筈である。

また、[3] では最初からフロッピーディスクで編集し、原稿を技術評論社に提出している。ここでも一太郎 Ver.3 を使い、最初は 5.25 インチのフロッピーディスクのお世話になっていた。最近は 3.5 インチのフロッピーディスクも使い、メールも使っている。

5. 用語の収集と説明 (1)

用語を集め、それを解説するとなれば、そのソースが問題である。具体的なソースをどのように探すか、また、多数の用語とその英文などによる表現を正確に収集するにはどうしたらよいか。これは、決して単純ではない。とりあえず、最初は共立から数冊の参考文献を送っていただいた。

また、ソフト関係の雑誌などを読み、そこからデータを拾うことも必要である。こうして、新聞や雑誌その他から用語を集め、その意味を調べる日が続いた。時間とともに用語の意味が多様化したときは、気が付いた時点で原稿を補充し、修整することとした。これは長期間の編集の場合にはやむを得ない。

たとえば、UNIX は AT&T 社の Bell 研究所で作成されたのが最初である。カリフォルニア大学のパークレイ校に Ken Thompson が留学した時点で、BSD 版が誕生した。こうして UNIX が分岐したことにな

こういうことを考えると、多数の人に書いていただくのはかならずしも適当でない。しかし、少ない人数でやれば、また別の苦労がある。データを集め、原稿を推敲し、時点の変化に合わせて内容を修整しなければならない。それはかなり大きい負担である。

両者を比べ、かなり迷った末に著者を限定する立場によることとした。実質は私1人だが、できあがった原稿のチェックは私がやるべきでなかろうから、それは共著者をお願いすることとしたので、結局3人でやることとなった。

用語の説明でも調整すべき多数の点がある。新しいことは取り込まねばならないが、将来予想される方向もできれば盛り込みたい。もちろん、プロトコルの設定などは時とともに進行するから、歴史的立場も必要である。また、コンピュータサイエンスでは、時間の経過とともに用語の内容が多様化することがある。極端なときは、半年以内に用語の表現や内容が変わることもある。このような場合、その多様化をきちんと記録し、なるべく詳しくしかも簡潔にまとめる必要がある。また、場合によっては取り上げた用語や説明を捨てなければならないこともあろう。

各項目を〔日本語名〕〔英語名〕説明としてまとめることとした。ワープロ関係などでは英語名がないことがあるから、その場合は英語名を省略する。場合によっては日本語名のないこともある。

もちろん略語が多いから、それも取り入れることとした。この場合は、正式の英語名と日本語名を付け加え、＝によって置換されることを示した。説明をどこでやるかは特に定めなかったが、これはできればきちんとすべきであったろう。

説明の長さは特に定めなかったが、基本的には数行から数十行であろう。これは内容によって異なる。また、関連項目は→で示すこととした。こうして基本が定まったことになる。

本を書く場合は、読者層をどうするかが問題になる。〔3〕は、中学生や高校生を基本とし、大学生などにまで読者層を広げている。ここでは、もう少しレベルを高く設定し、専門家にも参考にしていただくこととした。それに合わせて、それなりに文を推敲する必要がある。単に他の本の丸写しでよいというわけではない。丸写しの量が多ければ、著作権侵害の恐れがある。また、事項を取り上げる立場によって文章の骨格が定まるはずだから、そこは十分に注意しなければならない。こうしておおよその予定が定まった。

4. 最初の用語収集

最初の用語収集は大島と松山にお願いしたが、以後は私が収集し、その説明を他の2人がときどきチェックすることとした。そこで、別の日にもう一度集まり、彼らが集めた数百語の基本用語を私が受け取り、仕事が始まった。その数日後に、松山が基本用語をさらに集め、私のところに送ってきている。これが出発点である。

技術の進歩は素晴らしいもので、この頃から一太郎 Ver.3が使えるようになったので、最初からこれで編集することとした。マシンとしては、研究室にあるPC-9801を使い、原則として5.25インチのフロッ

困ったことを記憶している。特に訳者たちの英文に関する読解力や日本文の表現力—これが翻訳力というものであろう—の差には悩まされた。もちろん、Sipl 自身の誤りもある。気が付いたものはすべて直したが、それでも読者から御指摘をいただいた個所がある。

その編集を最初は私だけでやるつもりだった。原稿が集まった時点でその大変さに気が付き、大島と松山を追加したというのが正直なところである。原稿を眺めてから気が付いたというのは私の「うっかり」だが、大きな編集にぶつかったのはこれが最初だから、仕方がなかったというべきかも知れない。

[2] の原稿はすべて手書きで、しかも膨大であった。これを共立に納入するときは、大島の自家用車で運んだが、もしこれをフロッピーディスクで納入するとしたら、数枚ですんだ筈である。これと [3] における経験が、フロッピーディスクを使うことにつながっている。

それはとにかくとして、[2] では結局調整が不十分で、内容が気になっていた。また、[2] の用語にハードウェア関係が多く、私たちの仕事からいえば適当でないことなどが影響している。

それから2~3年たった頃、そろそろ在庫がなくなりますから再版しましょうといわれたのが、[1] につながっている。共立に私と大島、松山、小山が集まり、相談した結果、[2] の再版はしないことを確認し、我々で新しいものを作ることが定まった。これが1986年ごろの話である。

なお、この席上で用語の範囲やその説明などについて確認し、原則は「ソフトウェア関係の用語を主とし、それに必要な範囲でハードウェアの用語も含める」こととした。

ソフト関係を主とするのは、我々の基本原則である。それに何を追加すべきかが問題となろう。辞典は原則として self-contained であるべきだから、上の方針は正しいと思う。実際にはこれに認知科学関係の用語が加わり、最初の約束よりも範囲が広がったことになる。なお、[2] は原則として参考としないことも確認したような気がする。

3. 原則の設定

辞典に限らず、最初に考えなければならないのはどの程度に著者を集めるか、その内容をどの範囲とするか、読者対象をどう設定すべきか、などである。

どの程度に著者を集めるかということについては、かなり悩んだ。大勢でやればやったで、編集でまとめる苦労がある。この苦労はかなりのもので、誰に何を頼むか、誰がその原稿を修整するか（人によってはうっかり直せないこともある）、時間の経過にともなう用語の変化をどう取り込むか、ということなどがある。

[2] では多数の訳者がいたので、その調整が大変であった。文句は出なかったけれども大幅に直さざるを得なかったということである。結果としては、このときの経験が生きたことになる。このように多数の人から原稿を集めた例としては、[5] がある。ここでは約200人の執筆者がおり、調整が大変だったということを聞いている。また、岩波書店から出版された岩波数学辞典（日本数学会編集）でも多数の方から原稿を集めており、かなり編集が大変だったようである。

辞典の編纂について

岡本 茂

Edition of Dictionary

By Shigeru Okamoto

1. はじめに

これは精説コンピュータ理工学辞典(文献 [1]、英語名 The Dictionary of Computer Science and Engineering)の企画から出版までの記録である。同書は、文献 [2] よりもう少しましなコンピュータ辞典を作ろうという話から始まり、1997年7月に出版された。ここに、同書の編纂を含め、用語の収集や取りまとめ、書名の決定、その他についてまとめておくこととした。

これには、いくつかの意味が含まれている。まず、私がこの辞典を作ったときの作成要領という意味がある。これは同じような辞典を作る人のお役にも立つかも知れないし、少なくとも私がこの種の辞典をもう一度作ることがあれば、かなり役に立つであろう。

さらに、このような辞典を作る機会はそれほど多くないということである。筆者は文献 [2] から始めて、たまたま2冊のこの種の辞典を著作編集することができた。初心者向きには文献 [3] を10年近く著作編集しており、これはもう少し続けなければなるまいが、[1] のような大仕事はおそらくこれが最後であろう。

ただし、こういう辞典の常として数年後の改版がある。それに備える意味でもこういうノートはあった方がよい。私の個人的記録という意味を含めて、仕事に関する記録を保存しておくべきだろうと考えた。改版計画もスタートしている。

なお、引用した方々の御名前はすべて敬称を略することとしたので御了解をいただきたい。[1] の出版では共立出版(以下、単に共立と略す)の協力が大きいですが、それについては、同社の小山編集課長にすべてを任せてしまった。計画の時点から出版にいたる長期間で、彼にはたいへんお世話になったことを特記しておく。

2. 辞典の発案

私どもは1984年にマイクロコンピュータ辞典を出版した。これがコンピュータ関係の辞典の最初の編纂である。翻訳に当たった方々は多いが、編集者は[1]と同じメンバで、かなり大変だった。

今だからいえるが、誤りをどう直すか、翻訳は適当か、説明文の調子をどうするか、などでたいへん